

## 授業評価アンケートの先にあること

工学部では、本年度も授業評価アンケートを実施しました。アンケートの回収率は、前期開講科目で67.8%、通期および後期開講科目で49.3%でした。この数値は、個々の授業科目を受講した学生の中でアンケートに回答した者の割合を、アンケートを実施した授業科目で平均したものです。全体を平均すると60%弱と言ったところですが、この数値は高いのでしょうか、低いのでしょうか。

工学部の授業評価アンケートは実施されて11年目を迎えますが、工学部教育委員会の重要な議題として、質問項目の内容や、実施の方法、アンケート結果の学生や教員へのフィードバックの方法など、毎年議論が重ねられてきました。その結果の一つとして、本年度のアンケートからウェブを利用した実施に変更されました。1年生は知らないと思いますが、昨年度までは、主に最終回の授業のおわりにマークシートを鉛筆でマークする方法で実施されてきました。この変更によって、アンケート用紙やアンケート結果の集計にかかるコストは大きく削減されました。しかし、いくらコストがかかってもそれに見合うだけの成果が得られるのであれば、マークシートを使っても良いのではないのでしょうか。コスト削減だけが変更の理由ではないはずです。

さて、本年度のアンケート回収率の話に戻しましょう。冒頭の回収率、皆さんはどのように解釈しますか。私は、決して低い値ではないと考えています（できれば、後期実施分の数値がもう少し高ければ・・・）。ウェブを使った方法では、それぞれの学生が自由な時間を使って定められた期日までに回答を入力します。そこには、これまでもまして、学生諸君の主体的な意見が反映されていると解釈できるのではないのでしょうか。回答しなかった学生の意見も大切かもしれませんが、教員はこのアンケート結果をより真摯に受け止める必要があると考えています。

当分の間、同じ方法で工学部の授業評価アンケートが実施されるだろうと思います。より多くの学生諸君がこの授業評価アンケートに参加してくれることを期待します。千葉大学をさらに良い大学にして、より高きを目指すために、教員と学生が一丸となって取り組むことのできる機会として、この授業評価アンケートが益々意味のあるものになることを切望しています。

2014年3月

工学部副学部長（教育担当）

岩永 光一

## 「授業評価アンケート」を通して教員を知る

そのアンケート方法、内容は少しずつ変化していても毎年学期末に課されるこのタスクを学生諸君はどのように感じているのだろうか。最近はSNSの普及にともなって本音に満ちた「裏授業評価」なるものが飛び交っているのであろうと思いつつ、この表（おもて）の「授業評価アンケート」が、学生にとっても教員にとっても、単なるタスクでなくお互いに先に進むための一つのきっかけ、道標になればと願っている。今年度も多くの先生方にご協力をいただきながら、その方法と内容の改善を試みてきた。そして、その結果はどうだったのだろうか。アンケートに答える側、それを受け来年度に向かおうとする側、それぞれの表情を思い浮かべながらこの巻頭言の作文を進めている。

今年度は、これまでのマークシート式から「工学部・工学研究科 シラバス・時間割システム $syll$ 」によるweb入力形式に切り替えた。そのアンケート内容は昨年度同様のものとしたが、マークシート形式では裏面記入となっていた自由記述欄への書き込みが、これまでより活性化された感がある。おそらくweb入力形式は、比較的ではあるが自分の枠を超えた書き込みが容易なのであろうか。教員にとっては耳触りのよいコメントも、辛辣なコメントも増えたように思われる。これはこれで授業評価アンケート改善の目的に合致しているのではと勝手に思っている。さらに今年度は、このアンケート結果を受けた教員からのコメント入力形式も変化した。教員には、担当する科目ごとに $syll$ 上において教員が選択した個々のアンケート項目に対する回答、意見を書いてもらうと同時に、その科目に対する授業評価アンケート全体に対するコメント、その他の自由コメント、学生への連絡事項を入力してもらうこととした。そのために、この「授業評価2013」はこれまでの「授業評価」とは見え方が異なってきている。その変化により、そこに含まれる教員の声が読み取りやすくなったのではとも考えている。コメントの文字数指定などの制約を外したため、これまでの「授業評価」が持つ体裁の整然さは失われていると思うが、この「授業評価2013」を通して、授業に参加した学生の声、教育現場に臨んだ教員の声を読み取ることが少しでもできたとするならば、「授業評価アンケート」は幾分前進したのではと思ってもそれほど間違っていないのかもしれない。巻頭言としてはそれらしくない内容となってしまったが、この「授業評価2013」を斜めにでも見ていただき、学生自分自身、他の学生の状況、そして教員そのものを知る機会の一つにして欲しいと思っている。

2014年3月

工学部教育委員会

委員長 久保 光徳